

914.6
Ta525s
H

松
窓
餘
韻

914.6

096111-000-4

914.6-Ta525sH

松窓余韻

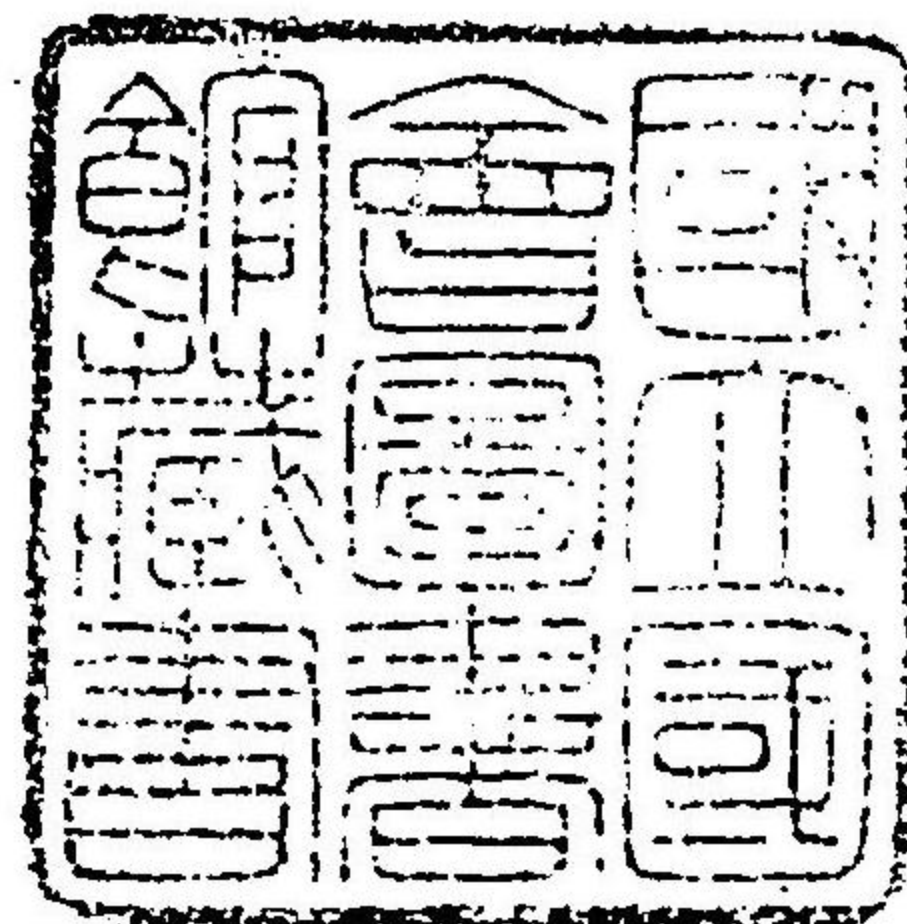
竹村 鍛鍊 / 著

M36

DBR-0387



2146 Ta5250H



松 窓 餘 韻

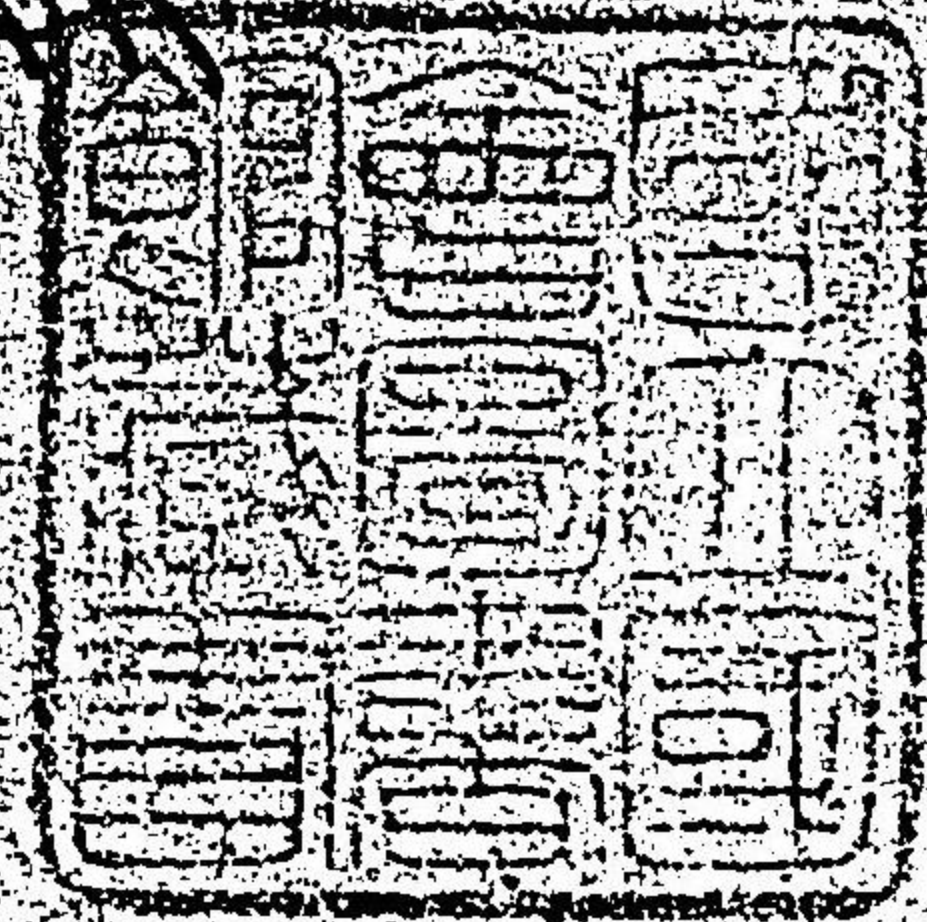
傳 序 學 傳
餘 漫
物 吟
評 語
論 論



336920



Harstot's 440



松 窓 餘 韻

傳 序 學 日
餘 餘 餘
漫 物 漫
吟 語 吟



336920

傳

中兄名を稽三郎というて、鍛は名のりである。慶應元年十一月伊豫松山坊主町に生れた。父の後妻の長子であつたので、母方の絶えた家を繼いで、竹村家を起すことになつた。子供の時は並外れた多辯者であつたといふことであるが、五歳時分から、どういふ原因であつたか、非常な吃りになつたが、明治十八年の三月上京して後は、其吃りが段々治つてさまで耳立たぬやうになつたといふことは、親戚故舊の常に一奇とするところである。幼ない時から手先が器用で、綿密で、文人畫を習うたり、字を書くこともすきであつた。父が漢學者であつたから、自然漢書は相應に讀むことが出來た。年長じてからは、松窓といふ雅號を父につけて貰うて、詩を作り、文を書きもした。この遺稿中の詩は多く當時に出來たものであらう。二十一歳の春上京して、斯文齋に入學した。それは漢學を専修する意向であつたであらうが、當時は洋學の盛んに流行して居つた際

であつたから、直に斯文齋を辭して青山英和學校に轉學した。學問の方向をかへることに就て再三父との往復があつたやうに記憶する。其後大學選科にはいつて國文學を研究するやうになつた。兄は前にもいふ通り、綿密な細心な男で、何事をするにも、よく前後左右の關係を考へなければ着手しなかつたから、其目的の漢學より英學に轉じ、又た國文學に轉するまでには種々焦心苦慮したのであつた。だから晩學にも關らず幸ひにも年二十七で順當に其業を卒ることが出来た。始めて神戸尋常師範學校に奉職して、其年結婚した。神戸に居ること四年、東京府立尋常中學校に轉じ、後高等女子師範學校に教授となつた。明治三十三年十二月肺を患へて再び起たず、翌三十四年二月一日享年三十七で永逝した。一女二男の患れがたみがある。

右は兄の履歷を畧叙したのであるが、不幸短命に終つたとはいへ、世間の多くの人に較ぶれば寧ろ幸運な人であつた。そは其性質が然らしめたものであらうけれども、學校を卒業する直に職を得る、其職も次第に

累進する世間の風波と戰ふといふやうなことの無かつたのは、寧ろ幸運でなければならぬ。

日本に完全な字書のないといふことはかね／＼言うて居つた事であつたが、遂に自ら其字書を作るといふことを終生の目的とするやうになつたが、未だ其緒にも就かないで終つたのは、兄の千古の恨みであらうと思ふ。

兄は細心であつたのみならず、非常な潔癖であつた。食物、日用の使用品に限らず、親戚故舊にもすきときらひがあつて、人と交際する上にも其潔癖を忘れることが出来なかつた。が、權利義務を重んずることは常人に過ぎて居つて、必ずしも其潔癖に片よらなかつたかとも思はれる。西洋の書物を讀出してから、非常な西洋すきになつて、衣服食物は固より、坐作進退のことまで、常に日本の習慣を厭ふて居た。若し兄に巨萬の富を有せしめたら、家屋庭園、日用の家具まで、恐らく西洋風に模したであらう。

元來庭弱な生れで、子供の時から大人振つて居たといふことであるが、子供を持つやうになつて後は、尙更老人めいた。それで衛生のことには殊に注意して、家憲尤も其方面に厳しかつたといふことである。予の如きも、いつも兄の家で飯を食ふたび、其飯の殆ど粥に類するのに驚くほどであつた。

兄の遺稿を編まれるといふことで、昔を想ひ出し一二の事をかきつけて見た。

明治三十六年一月四日

末弟 秉記

序

故竹村鍛君と余と相知りしは、去る明治三十二年の春、君が女子高等師範學校教授となりて、余と同じ所に職務を執られたる時よりなりき。相知りたるは、しかく遅かりしかども、君が名を聞けるは既にひさしかりき。そは君の益友にして、余にも益友なる芳賀矢一君の物語にて、君の温厚なる君子なる事、和漢英の學に兼通する事をも聞き及びて、慕はしく思ひわたりしに、一度相知りてより、いよく君の用意の篤實なると、職務に勉勵なるとに感服し、且は同じ學科を分擔したるなれば、君が學殖の程も知られ、綿密周到なる考へを以て、事にあたらし、状をも見て、ますます懐かしく、遂に無二の友と呼びかはし、互に相識る事の遅かりしを恨みたりき。

君と相識りてより、別れし迄は、僅に二年ばかりなりしかど、日々一つ意の下に机をならべ、同じ志をもて、うらなく交はりたる中なれば、余の知

れる君を、今こゝにかきあらはして、年經ん後の思ひ出ぐさにせむ。

君は性質靜肅にして、常は沈黙せしかども、事を論ずるにあたりては、しづめる聲調に力をこめて、條理明晰に辯せられぬ。學科の講義などは、微を穿ち奥に到りて、しかも繁絮に流れず、平易明瞭に釋きなされしかば、學生の君に敬服せし事大かたならず、よくわかる先生とは、一度君が講義を聽問せし者の、齊しく稱ふる所なりき。殊に漢文の教授には、特得の技術ありて、尋常漢學家の講釋とは、其の趣を異にしたりき。君は又我が國語の學に明らかにして、尤も斯の道に精力を用ひられ、ゆく／＼は、此の筋の著述を、あまたせらるべき心構ありし事、をりにふれては語られたりき。

君は何業にも勵精せられし事實に感嘆すべきものありき。三十三年の八月、學校の窓は、例によりて閉ぢられぬ。我れら朋友は、皆休業の暇を得て、身のほど／＼に隨ひ、避暑がてら山水の勝地に漫遊せりき。此の間、君は某夏期講習會の懇請により、其の講師として連日講壇に立たれたり

き。君が教授の親切なる由を聞き慕ひて、來たり集まる者三百に餘りぬとぞ。時は盛暑の頃なりき。人は如上の多數なりき。君は常低き聲をはりあげて、例の懇篤に講演せられし事、一日片時も闕きたる事なかりしかば、其の熱心と勵精とは、一層講習生を感せしめて、さしもの大勢なりしかど、恰も水をうつたる如く、一人の、あなあつとうめく者もなかりきとぞ。かくて日暮れては蚊帳に入り、机に凭り燈火に對して、讀書記述に夜をふかしつ、ある夜半、筆とる手先に蚊の聚り刺すもの夥しかりき。怪しと思ひて見まはせば、かねて城壁と頼みつる蚊帳の上部は、いつしか燈火のほのほに焼き破られ、其の虚をついてぞ、不意に蚊軍は侵入せしを、つゆも知らざりける也と、自から笑つて語られたりき。余は曾てより君が體質の強からざるを知らば、さる過度の勉強は、其の身に害を來たすべしと、より／＼諫め聞えしものを、君も喜んで領かれたりしよ。君はまた常に運動をつとめ、教授のいとまには、網手ネットとつて投球ボウリングの技を弄び、汗水あせになりて人と競ひぬ。是は、其の身體を強健にして、事に堪へん

の用意なりしならめど、あまりに精神をも身體をも勞せし結果は、中々に病魔を招きて、身の仇ともやなりにけむと、後に人々いひあへり。君は幼きより不幸なる人なりき。之れを君の令弟に聞く。君生れつき多病にして口吃せり。をさな友どちは、常に君が言どもりするを笑へり。君憤りに堪へずして、遂には友と遊戯する事を嫌へり。やゝ長ずるに及びては、大かた室内に書を讀みてのみ娛めりと。君が壯年にして、既に博學多識なりしは、口さがなく笑ひつる童どもの賜物なるべく、初の不幸は、後の幸ひとはいはいふべし。年十八の時志を立て、只一人家郷松山を出で、東京に向かはれしが、まづ大坂までは便船をかり、それよりは歩よりぞ上られける。是れまで家にのみありて餘所を知らず、師父兄弟の外には、をさく詞をかはさうりし身の、遙けき道を伴ふ者なく、來る里毎に話勢もかはり、田舎訛りの聞きなれぬに、わが言葉も亦ゆき通らず、人に怒られ笑はれて、さこそ辛勞を重ねつらめ。後年、語學に力を盡くし、辭書文典の著述を心がけられたるも、思ふ所ありての事かと、君の歿後、

是れも令弟が涙ぐみての物語なりき。

かくて東京に着きて後、漢英の學を兼修する事數年、故郷の友、親族の人、別後三年といふに上京して、君にあひしに、いつしか言どもりする癖はやみて、辯舌よどむ所なかりしかば、皆驚かぬはなかりきとや。かく生來の病癖を改められしは、君が事にうち克つ耐忍の氣象に、富まれしに因るものから、此の間の苦心慘愴、いかばかりなりしぞと思ひやらる。君の學才は人に知られざりき。是れは君の交はる所廣からざりしにこそ因りけめ、君が交はりの廣からざりしは、友を選ぶに嚴に、身を持する事高かりしに因る。或人は、君幼より辛酸を嘗めて學に従ひ、業成りて後も、有爲の才を抱きながら、多く知己を得ずして、軟軻不遇なりしかば、乃ち俗人と語るを懶しとし、唯靜かなるを求めて書にのみ耽り、遂に陰鬱の氣を長じて、かくはありしかと云へり。女子高等師範の教授として、是れより驥足を展ぶべかりし時節に到着し、心底大に勇まれし間もなく、うたてや不治の病に罹り、其抱負も其事業も、むぐらと共に埋歿せしこ

そ、くちをしくも悼ましけれ。

十

三十三年の九月八日の朝、芳賀君が獨逸留學の船出を横濱に餞して後、君と岡倉由三郎君と余とは、うちつれて歸路につきしが、途中海を傾けたらむ如き驟雨にあひ三人ともにやう／＼余の家に入りつゝ、濡れたる衣服を着かへなどして、茶を啜りつゝ、雨のやむをまち、黄昏まで談笑せられしが、これを君が余の家遊びに度、最後とす。

此の月三十日、君は余と同じく大學附屬館に於て開かれたる、言語學會の席に列し、夜九時頃、例のうちつれての歸るさに、君は突然と頭痛く身もたゆし、感冒にや。とつぶやきぬ。君とつれだちて道を行きしも、此の度を限りとしたり。さて翌日より心地例ならずとてうち臥したるが、君を診せし醫は、余の知る人なりければ、余には、其尋常の感冒にあらざる事を告げ知らせぬ。果して其の後、俄然咯血はせられたりしよ。

風すさましき秋もや、末野の草のかれ／＼に、蟲の音よわる頃となりては、いと病勢重り行きて、明くる年一月の初に、赤十字病院に入られ

しが、終に二月一日の朝霜と消えにけるこそ悲しけれ。其の程の事ども、今更に記さんもうたてしや。

君に別れてより後、諮るべき語るべき事のある毎に、あはれ君なくてと嘆き、君あらばと慕はれつるに、今茲芳賀君の専ら事とりて、彼の人の遺稿を編みなさるゝ、先づ何よりも嬉し。そは、竹村君の大學に在りける頃より、常に芳賀君を益友として、尤も知己の恩に感じられたりしは、交友中誰知らぬ者もなし。その友の手に遺稿を校刻せらるゝに至りしは、苦の下にも、喜び聞えざらむと思へばなり。さて余にも一言添へよといはるゝに、辭みもあへず筆とりたるものから、ありつる事のみしのばれて、知らず／＼、かうくだ／＼しき線言とはなれるなりよし、人は讀まであれかし、己れひとり、思ひ出ぐさにとかきしものを、若し幸ひに同情をよせて、文辭のみだりなるは、た其の體を得ざるをも咎むる事なく、之れを以て君をしのぶの露のよすがともしたまは、此の年月のいぶせかりつるも、せめてはるゝ心地すべくなむ。

明治三十六年一月十六日

十二

關根正直しるす

序

明治三十三年の中秋、諸友余が獨逸留學の首途を横濱埠頭に送られし日、竹村君は一氣車をおくれて、あだかも出帆の間際に參着せられしかば、互に帽子手巾を打振りて、挨拶こそしたれ、告別の一語をだに交ふる暇なかりき。今にしておもへば、これ十餘年來の親友が最終の會見なりしよ。二ヶ月に垂んとする長途の航海を終へて、伯林の假寓に夢未だ圓かならぬ夕、第一回の郷信は、忽君が咯血の病あるを報じ來りぬ。異郷の霜雪につけても、君が病狀の心にかゝらぬ時なく、あはれ一日も早く眞幸かれとのみおもひ煩ひたりしに、三月の末といへど、堅氷厚く鎖せる石疊の大路を踏鳴して、郵夫の齎し來れる第二回の音信には、君は早くも白玉樓中の人となり終んぬ。六月以前女子若鬢の運動部長として、健全に立振舞ひたりし君が容貌を想浮べて、余はほとほとこの凶音を信すること能はざりきや。

の夢ならぬを信するに至りてもいかなれば君は殊更に余が短き留學
期間にこの世を去りしかと甲斐なき憾を抱きたりきはては君が未亡
人君が遺孤の事に想到りて客窓孤燈の下潸然として悲涙にくれしこ
と幾回ぞや餞別として送られし毛絲の靴足袋手に取る毎に今はあだ
なる歎やむ時もなかりき十年の交遊願へば長けれども一朝の別離何
ぞしかく忽焉たりし。

歸朝の後語らんに友なし。歐洲の山河美術文學君あらませばと遺恨日
に切なり。机邊に在る君が幼時の詩草に雜著一二篇を加へ名づけて松
窓餘韻といふ。嗚呼この餘韻の忘れ難さよ。

明治三十六年一月十五日

芳賀矢一しるす。

學餘漫吟

松山 竹村鍛鍊卿著

○詠史致盛

平門將帥如兒女。獨有此公名姓芳。不啻風流携玉笛。孤騎返闕見男腸。

○望海

碧浪絕塵埃。海樓四望開。遠帆恰如坐。不識去耶來。

蘿谷先生評。屢目此景。未見此時。

○星岡懷古

松末村頭落日斜。星岡山外白雲遮。一枝枯杖尋陳迹。唯有東風吹柳花。

○夏山欲雨

鐵馬聲中午夢回。軒窗寂莫坐呼杯。輕雷隱々涼如水。應是何山急雨來。

學餘漫吟

蘿谷先生評快爽可想。

○三坂嶺口占

萬尋石逕最危傾。後者戴前人履行。知得深山有殊候。併聞鶯語與蟬聲。
蘿谷先生評深山景況寫來如睹。

○夏曉郊行

旭日曠々山色蒼。趁風牽杖褐衣涼。野人早起無些事。緩步田頭看早秧。

○山行看楓

沿溪獨步水如弓。崖路奇欹細棧通。霜露秋深林葉落。滿山風景屬丹楓。
靜溪先生評大適題意。

○咏史

詩仙堂裡撫瑤琴。脫蹤風塵豈素心。忼慨滿腔人不會。哀情渾託萬篇吟。
蘿谷先生評翁應首肯于地下。

○春日田園襟興

春吹度山樓。倚窓閑索句。箔搖時有香。不見花開處。

○立冬

秋候已過楓葉殘。搖窓竹影月團々。讀書倚几空齋裡。今夜寒加昨夜寒。

○立秋月夜

今日始開爐。斯爐如熟友。禦冬已得謀。何必嘆無酒。

○開爐

一陣金風拂樹吹。梧桐露落月升時。倚欄獨望嫦娥色。才入新秋乃自奇。

○藤肥州兀良哈望富岳圖

蹂躪鷄林如怒鯨。鬼名猶且止兒嗶。免兜揮淚拜遙岳。一點丹心憶故城。

○看梅

十里梅隄蒸彩霞。紅葩點々受風斜。江南雨血君休恠。到處林間看落花。

蘿谷先生評奇想。

○初夏襟咏

綠樹扶疎影滿樓，獨敲詩句興偏幽。黃昏曳杖步閑砌，得雨新筍始見頭。
蟠松評實況。

四

○春郊散策二首之一

嫩草如煙滿野塘，青溪水漲響鏘々。柳從雨後偏添色，花向風前稍放香。本爲
閑行養吟骨，却教幽景鼓詩腸。林頭時見鐵山角，山帶紫霞映夕陽。
蘿谷先生評，二聯并佳，穩雅可喜。

明治十八年乙酉

○臨出題壁

孤劍飄然向帝城，豈容南海了斯生。看山跡學許元度，題柱心期馬長卿。幽鳥
間花春二月，烟村水市路千程。遊蹤不啻探名勝，要訪民風與世情。

村山拙軒曰宛然高青邱

浦屋雲林曰全壁無微瑕○又曰後半殊佳太似晚唐調

○琵琶湖上口占

湖上景光稀匹儔，青鞋今始試探搜。雲籠古寺鐘聲小，雨濺老松琴韻幽。風月
半旬萍樣客，烟波十里葉如舟。明朝應自何邊去，山色連天是勢州。

雲林曰頸聯六如人口吻

○余之出鄉也內藤某甫亦將上京因與俱至四日市某甫乘船余
猶取陸路臨別賦此贈之

携、手、出、故、國、並、杖、踏、萬、山、同、衾、荒、驛、夜、換、衣、寒、雨、晨、相、親、能、幾、日、忽、又、唱、陽、關。
君向遠州洋，鯨波渺如雲。吾指東海道，千山兀摩天。水沮又山隔，相思情幾般。
聚散元命耳，徒勿費悲歎。有散必有聚，天道亦循環。此別又非久，僅是半旬間。
預期還隄上，相對倚欄干。烹茶又溫酒，閒談交悲歡。

雲林曰起手帶豪氣古體佳境

○尾州途上過前須驛

芳草如雲官道平，長河劈地注東瀛。暮煙殘照熱田路，始認天邊金龜城。

雲林曰行旅中如此佳什難多獲○又曰跋涉勞疲之餘始字下得妙甚

○駿州途上密雲蔽岳僅見其大麓

參遠徑過又駿山自驚衣上垢塵斑岳神似厭飄零客故倩雲烟蔽玉顏

雲林曰詩則佳矣轉結命意微覺陳套

○乙酉四月念五日遊小金井以東至咸韻賦絕句三十首途上漫

吟疎笨倍常聊存當時與會以供他日話柄耳錄三

春風憶昨去桑輪五十三亭多勝區才卸行滕席猶冷又驅瘦馬出東都

雲林曰起承句可稱

東風一路送芳薰滿地春光已逸群忽認白雲遮野逕那知花影亂紛紛

路通濃影淡香間幾隊觀花人往還蕙地風吹花如雪飄葩點袖白斑々

雲林曰春光可掬

○正岡子清見訪席上次舊作韵

滿襟休恠泪淋漓慷慨憂時此一時却憶家山風雪夕對床別燭學唔伊

○送天岸靜里翁遊下毛

欲探形勝養文情老筆欽君掣海鯨飛瀑千尋林外落奇峰萬壘馬頭迎滿囊

珠玉壓肩重半擔琴書抽脚輕北地候寒却多興山村五月有殘櫻

拙軒曰前聯雄壯後聯穩雅斤兩相稱

雲林曰前半一氣呵成宋詩之佳境天翁激賞可想也

○學憲漫吟

米囊花落客衣單倦翮伶俚鳥識還疎雨宵々撲窓冷杜鵑聲裡夢家山

山本晴谷曰句句呼應

○秋夜感懷二首

志業多乖戾光陰不可追屠龍果何用畫虎遂徒爲國遠雙親老秋深百事悲

半宵眠叵就墜葉撲寒帷

立志當超拔毀譽曷動心草文漫摸古讀史轉憂今四海多知己三餘須惜陰

夜窻坐燃燭道味箇中深

岩谷一六曰前首勁健後首古樸俱為五律本色

拙軒曰二首情韻雙絕

松井友石曰抱鯤化鵬之志者往々有驚鵠困鱗之歎古今同感

○秋日書懷

客裡秋風早。蕭々萬木萎。驥未翔逸。鴻燕例差池。排悶雖由酒。掃愁莫若詩。胸中無限感。唯有碧翁知。

雲林曰起得自然

自註近者閱杜詩一聯與拙詩暗合

○冬夜讀白鹿洞揭示

秋風擺葉吹已殘。又遇嚴霜壓瓦寒。天涯滯蹤久不返。家山渺々夢空牽。一夜書窗獨燃燭。鹿洞揭示手數緇。幾度欲讀々不得。暗愁塞胸泪滑々。憶曾負笈辭家日。家君慇懃垂訓言。是書雖簡道盡此。可以治國可修身。汝視此書猶視

我朝夕諷誦勿敢緩。噫吾辭家已半歲。學未進兮德未純。自今決然益奮勵。管明斯道拂妖氛。從事於斯斃後已。即是所以報父恩。悔往警來中情熱。不覺寒風鳴窻間。却思今夜高堂上。家君說吾應未眠。

○冬夜即事與坂本鼓山速水松癡賦分韻

放課時呼友。團欒月幾更。庭荒幽竹亂。窻冷老松橫。新舊談慰意。短長詩寫情。交遊須淡泊。苦茗撥灰烹。

○送坂本鼓山歸省分韻

高堂垂白在。百里促歸裝。熟路亭長短。快車煙渺茫。門前稚犬逐。屋後老梅香。膝下團欒處。綵衣映鬢霜。

雲林曰亦起得自然

○歲暮感懷與松井友石賦分韻得微

瞥眼年光疾似飛。獨彈長缺恨依依。客中情味甘兼苦。世上功名是又非。敗簾文章空磊落。孤襟慷慨漫歔歔。家園回首老親在。日夕倚闥待我歸。

雲林曰佳律々々後聯頗有晚唐風調

十

明治十九年丙戌

○丙戌元旦

東窗閃閃捧紅輪。物態人情一樣新。穿竹鶯聲清有曲。上簾梅影澹無塵。短衣長缺久爲客。冷酒殘茶宜守貧。且掃蠹書呵破硯。又迎二十二年春。

雲林曰結二句足振全首

○七月廿七日遊日光山汽車中口占

快車破曉淡煙浮。武總郊連常野州。三十里程行欲盡。曾無黛螺入吟眸。

○謁東照大猷二公廟

金樓映日倚林邱。何用如今說黍憂。經國雄圖開十世。營宮餘事絕千秋。乘槎蠻客携家滯。探勝清人載筆遊。地下神靈定含笑。威風洽及遠西州。
拙軒曰一聯括盡晃山勝概

○寓樓雜詩三首

借得村樓寄此生。剩毫殘楮手親擎。滿窗雲影與山影。半夜泉聲似雨聲。玄味參來知道大。塵緣脫去覺身輕。探奇既畢全無事。一卷南華細品評。

招軒曰前聯巧綴後聯幽雅配合有法

晴谷曰奇語驚入最得南華神髓者

忘炎兼覺忘塵忙。漫弄棋枰日轉長。度水鐘聲遙古寺。隔溪馬語冷斜陽。滿窗積翠浸衣碧。半畝幽花照眼黃。第一驕人非誣語。山中六月已秋光。

晴谷曰三四宛然唐調

小樓盡日起秋陰。想見京城午鏢金。展畫漫評濃淡墨。拈毫互闢短長吟。雖無世慮紛難解。猶有鄉愁鬱叵禁。遙憶故園茅屋底。老親說我坐更深。

晴谷曰涉帖之情可掬

○遊湯元四律錄三

殘日落出還。高低路幾回。瘦肩兢山聳。倦脚倩筇僮。樹亂岩皆立。遙窮湖忽開。

學餘漫吟

十一

湯元知不遠。白氣起林隈。

拙軒曰如見其境

晴谷曰前聯蒼古後聯遒勁如讀昌黎詩

山深開別境。瘵疾客常群。地秀炎威散。泉溫硫氣薰。櫺、櫺、洩、涼、月、老、樹、宿、歸、雲、
林外乳猿吼。淒酸不耐聞。

晴谷曰簡潔

引泉架長筥。淨潔絕塵氛。養倦初添力。瘵痾忽奏動。湖、光、澄、映、樹、湯、氣、鬱、爲、雲、
浴後凭欄坐。村醪一酌醺。

○發日光回東京

山秀湖深別境開。三旬滯跡忘塵埃。芒鞋半裂囊錢盡。又向鑠金鄉裡回。
拙軒曰每篇句鍊字磨不似遊囊中之作敬令服々

明治二十年丁亥

○七月四日遊南總嘉納山臨發得一絕

泉石由來養我情。自期飄泊老斯生。淡煙冷霧長江曉。復駕孤舟發帝京。

明治二十一年戊子

○六月廿六日得暑假歸伊豫松山留別隈本從繩々々時將遊奧

州松島故及分韵

萍蓬身跡易差池。分袂還成少別離。剔燭閒談永今夕。擊壺狂舞憶當時。欽、君、
僊、鳥、接、生、面、期、我、故、山、逢、舊、知、他、日、天、涯、相、憶、處、郵、筒、莫、忘、寄、新、詩、

內藤南塘曰後聯猶要一工夫

久保羅谷曰頸聯彼我相叙自成巧對妙

○叙近況寄正岡子清次其所示詩韵

鐵艦駕濤程八千。收將筆硯向鄉田。曠、看、翠、竹、新、公、苑、却、愧、青、衫、舊、少、年、書、積、

牀頭行郭索。畫懸壁上起雲烟。柴關盡日冠聲絕。占得人間小洞天。

南塘曰第四非加自字若吾字則意義巨通須再訂又曰第五亦恐欠鍊

雲林曰領聯有含蓄可稱

隈本調山曰不費力之處却見其熟

○再疊前韵寄子清々々時寓澤陀櫻塘第一曲樓

動學欽君功百千。兔毫爲末紙爲田。挑燈談理常終夜。傾蓋訂交皆忘年。老柳陰濃暗檐月。幽禽聲靜冷汀烟。澤陀風色宜消暑。三伏天如秋首天。

蘿谷曰領聯絕佳

山曰清凉可掬

○三疊前韵寄子清

長隄十里種櫻千。櫻下借樓隣竹田。粉筆不妨詩度日。玉壺何用酒爲年。軒窗風冷半江雨。几案香薰一鼎煙。僑寓欽君占閒地。避他塵坳漠升天。

蘿谷曰才筆可仰

雲林曰領聯句格雄渾太肖劍南

調山曰三四不用意而成五六唐人口吻

○四疊前韵寄子清

人百能之已則千。朝磨夕琢拓心田。詩吐肝肺將充篋。文折肘肱又幾年。真理嗜來甚饑渴。浮名遞去付雲煙。待君哲學窮源日。鵬翼飛冲九萬天。

雲林曰完璧可稱

○五疊前韵寄子清

買酒何慳拋十千。文園勤苦似耕田。疎才鬪韵消三日。迂性枕書過廿年。竹屋詩情澹燈火。石牀禪味颺茶煙。呼君且欲話幽意。其奈蒼茫遙海天。

雲林曰疊韵愈出愈奇作家技插

南塘曰以上五首皆未盡君之才蓋一時率作而不遑推敲者

○七月十五日六稜吟社席上卽事分韻

禪房例開宴。地僻絕街塵。搖竹風聲冷。入窻山色新。才雄裁句麗。量大喚盃頻。

父執咸連膝。追隨樂此身。

蘿谷曰前聯實景

○七月十七日訪武市士明於永田村士明嘗遊西京同志社修英學今從事於桑麻風流自娛席上賦呈三律

出郭牽筇舊友尋。披懷迎笑許知音。村幽人語天邊聽。山近嵐光枕上侵。落托愧吾存垢面。慙慙欽爾蓄冰心。豈唯十歲讀書樂。一夕對牀談素襟。

南塘曰村幽則人語在天邊其故何如

蘿谷曰奇境寫得自在

松竹陰邊三徑斜。蕭々鐵馬掛檐牙。喚鳧幽沼晨分食。迎客高軒午煮茶。時會村童教文字。又從野老問桑麻。欽君遯跡樵漁伍。繞屋風煙隔世譁。

蘿谷曰其人可想

雲林曰三首中竊采此詩

調山曰幽間之趣寫得宛然

漁樵伍跡忘塵機。不恠柴門客至稀。萬卷詩書圓机擁。數株松竹曲簷圍。一杯有味斟酸辣。百事無心爭是非。揮塵談玄斜日脚。又從鷗鷺步苔磯。

蘿谷曰好生涯

雲林曰頸聯亦佳句

○幽居雜詩

不妨門巷近塵街。繞屋翠筠交綠槐。窻豁有風生午枕。身閒無事到幽懷。睡醒庭樹時求菓。浴罷園池例聽蛙。日暮清涼沁骨處。兩三盞火照荒階。

蘿谷曰不愧前脩

調山曰清人口氣。又曰完璧無疵瑕。七律上乘

又曰尊稿八首無一不精。金美玉乳臭如僕者。何得容喙其間哉。然而猶下二三評語者。聊復前言耳。非敢軒恠也。閱終雲間月。隱清風入窻。夜極寂寥。頗有懷友之情。七月七夕後二夜。識于松島觀月樓第九房。

○寄懷隈本從繩在松島

奧北探奇題詠留遊蹤宛似海天鷗勝名久聽江湖噪佳作可無山水酬亂石
驚濤接回瀨淡煙素月映長洲想君江閣呼盃夕手展長箋字似虬

八月三日與兄鵬翼及弟秉奉家君遊二神嶋島距三津港五里在中
嶋奴和諸嶋之南周回四里景色絕佳留五日而歸得三律

○舟中口占

柔櫓鳴伊軋縈迴水路長嶋雲包屋舍礁石列鋒鋦舟小詩囊重蓬疎短榻涼
潮期誤亦好落日射浪黃

雲林曰前聯奇拔

○寓于二神氏二首

漁家連曲岸淡靄擁危檣潮落岩皆瘦岬欹樹欲僵民淳存古俗村靜似仙鄉
水榭橫肱臥濤聲洗目涼

雲林曰前聯似真山民

茅屋參差接瓦甍湘簾捲盡水風清當軒翠峯山皆綠繞檻瓊環沙亦明鱸膾

味鮮堆几皿村醪香美滿盃觥醉餘自覺吟思騰幾首新詩任筆成

近藤南洋曰嶋中鱸膾之鮮可羨村醪之美僕未能信

○暑中閒吟六稜吟社課題

門深無客訪酣醉到斜曛蕉葉吟邊綠荷香靜裡薰詩唯愛平淡酒當貴微醺
披葛桃笙坐閒看起白雲

○謁天岸靜里翁墓

手把蘋蘩供墓前京華詩宴憶當年愛才溫藉人如玉摸字清新筆似椽墳上
雨晴青宿草隴頭日落暗荒烟佳城寂寞君休嘆夙有名聲海外傳命曲園東
瀛詩選採

詩入翁

南洋曰合作

雲林曰岸翁地下之靈定莞爾

○八月十五日遊川內村々距松山六里餘有二瀑曰白猪唐岬高
各可十五六丈白猪瀑分爲二段唐岬則一齊直下誠爲偉觀午

前三時上途薄暮歸家得六絕句節五

日光七十餘名瀑。評品當年蛇足添。何計家山榛莽裡。藏斯百丈水晶簾。
 兩段冰綃天半張。雲掛絕壑盡淒涼。見山名勝借來比。恰與霧降相頡頏。白嶺瀑
 樹圍斷壁崑皆赭。萬斛飛泉一齊瀉。復把見山比擬來。寂光之上湯湖下。唐岬瀑
 壑底仰天鏡樣圍。飛泉亦似井中觀。水成雪片搏人袂。真個窮山六月寒。
 由來南海富名山。皆被高僧飛錫攀。堪怪當年然犀眼。却遺好個水雲寰。南山勝地多僧空海所開獨此鄉山不逢其一願亦一奇

南洋曰兩段樹圍二首詩品亦相頡頏

雲林曰聞兄獨步觀此瀑今見示此佳什數篇勝具之富兼詩膽之大不堪健美也

○八月廿四日辭鄉向東京

笑侍膝前僅六旬。忽唱離曲奈因緣。淒烟冷霧長江暮。吞淚又昇千里船。

○余之向京也取途於中仙道擔登飄然意在探勝概卅日過妻籠

驛始入岐蘇峽九月一日抵葭原驛峽盡其間十八里山水絕奇

余嘆賞不置得三律

送勝迎奇意未闌。閒遊兼有國光觀。濃州東去平原盡。信峽西來疊嶂蟠。地險
 既開新道路。俗淳猶着舊衣冠。山中休說無佳味。尺大香魚日上盤。
 危險何輪蜀道難。雙鞋踏破幾重巒。九回路欲衝天闕。百折溪疑裂地盤。老樹
 蒸雲猿叫絕。急灘吹雪客衣寒。古城時弔戰攻跡。落日秋風荒石壇。
 探奇日日度層堪。嵐氣如水詩肺涵。絕壁掛泉簾落落。懸崖植黍髮毵毵。溪邊
 無石不清瘦。林外有村唯兩三。知得山人富生計。家家鎖戶養秋蠶。

雲林曰第一首後聯圓滑第三首險韻穩押

○九月四日踰碓氷嶺望八州之野

碓氷飛下氣方雄。八國山川一望通。高下亂峰連與北。蒼茫平野限關東。天垂
 閃閃低斜日。地曠蓬蓬起大風。回顧朝來經過處。模糊既在晚雲中。
 南塘曰以上四首以君之才而得江山之助何怪其縱橫俊拔乎

蘿谷曰每篇長律才筆敬服不啻

雲林曰久米政聲君曾有岐嶼十二律吾兄之詩雖佳恐輸一籌

南洋曰詩才敏捷如此漢學之成既可卜今又加之以洋學所謂夜叉執鐵者嗚呼可畏哉

蘿谷曰七律累篇字句精鍊吾無間然妙齡之作既已如此他日之成豈可測哉乎近又修洋學其進步可想矣余刮目待其大成者也

明治二十二年己丑

○寄正岡子規在松山

萍跡今還在各天。交遊入夢感綿綿。長虹氣燭才無敵。瘦鶴性情痾有緣。南浦新愁薄於紙。故園舊物漠如煙。想君草屋聞鷓夕。洗筆續成啼血篇。于清前者病肺咯血

更字于規俳句有數十首題曰啼血篇

南塘曰後聯妙在可解不可解間

○再寄子規次其所示詩韻

宵宵歸夢繞鄉粉。想見君家清夜氛。風格曾抽俗流表。姓名却列韻人群。泉聲撲戶疑聞雨。山色當軒欲臥雲。養病唯須從適意。不妨乘興弄詩文。

南塘曰韻人改作稗官亦可呵呵

雲林曰第五句正岡子宅實景第六句則否可惜

正岡獮祭曰今夏與君廣酬數詩一則珠璣一則澗勃慚愧慚愧

○上常總遊途日得一絕句在九月一日單身上途時暑暇將終諸友出遊在外者稍稍歸來遊況別有記詳之

人返京時吾上途疎狂獨立任嘲迂。敝衫破帽一雙脚。欲訪波山與印湖。

雲林曰一氣呵成可誦
服部楠谷曰筑波山之與印幡沼距東京不遠而人無訪之者竹子之卓見出于世俗意表可景慕

○征旅歌自土浦至筑波山途上作之歸京之後改數字

人生常年少。氣候恒夏時。吾當拋百事。征旅送生涯。此語聞老李。諷誦慰我懷。

肩擔一箇包。足穿一雙鞋。包中無冗物。紙筆地經齋。或水驛投宿。風物助詩思。或荒墟留杖。遺物證口碑。村社祭儀古。山家婚禮奇。人情又風俗。旁搜無所遺。觀傍不當局。嘲罵交諷譏。嗚呼征旅樂。唯克真味知。人生常年少。氣候恒夏時。吾當拋百事。征旅送生涯。老李指英國作家李頓夏時合春夏秋而言也起結疊用同句做西詩體

南洋曰身閒脚健優游跋涉何等愉快不堪歎羨

雲林曰起結用同句屬體以僕視之結四句割愛為佳

楠谷曰作者做西詩起結疊用固當然也

○子規七草集題詞并引

去歲夏期休暇子規寓於滬陀月香樓著作自樂休暇終之後輯所得漢文詩國歌俳句謠曲論文小說以配七種秋艸名曰七艸集諸友評言溢卷余亦前既題數言子規今又乞題詩乃賦二律

門隔長江對九街。琴書成趣淡生涯。蘋莎抽水暗平渚。梧竹陰庭冷古階。禪榻茶香醫病骨。秋燈詩味遣閒懷。倩來七草托靈筆。何識聲譽壓等儕。

擊節令人喚快哉。恍疑滿卷綺綾堆。只宜七草呼知己。何啻三紅稱秀才。詩愛旭翁接遺響。文宗馬叟出新裁。欽君藻思如江海。隻手能攢衆美來。

拙軒曰閑澹幽秀似張船山

瀨祭曰玉詩二首使拙著生光彩厚意萬謝唯過賞不敢當

○初秋感懷

秋風蕭颯入郊墟。雙鬢參差懶復梳。陶子光陰惜分寸。許家月旦任乘除。飄零廿歲增新感。郭索百篇藏古書。氣味寒酸何用說。下帷且自課三餘。

南塘曰君詩才比之一二年前進數等是其因不一而足曰讀洋書通哲理曰修和學嫻婉詞曰繙小說達人情君自以為如何

瀨祭曰君詩閒澹瀟灑言短而韻長真老鍊手段禪榻茶香秋燈詩味欲移以評君詩

○十一月初七夜與內藤先生正岡子規共賦用寧靜閣集中詩韻
笑談握手露天真。是主是賓情自親。詞海君先鉤麗藻。源誰克酌芳醇。窻間

老竹月移影。瓶裡狂花坐。吐春當此良宵會佳友。且祈共作太平人。

南塘曰鈞麗酌芳二君好爲之僕則與老竹狂花相伴耳○又曰結句少失平凡

○紫式部

漫弄新詞品花柳。風情却似泥中藕。秋晴山月映湖波。夜冷佛燈穿竹牖。大筆果然冠古今。千年宜矣仰山燈。憐他清女衍才華。聲譽到頭落王後。

南塘曰字々鍛鍊句句彫琢如此而後可能咏絕代才女也

雲林曰句句流麗副其人

懶祭曰澹而有味我儕蓬蒿何得企及○又曰紫女揮艷筆吐艷語但惜兄不以艷詩贊之蓋紫女意素不在艷事故以蓮花比之乎然以愚考其意未必不在艷事也賜高教

明治二十三年寅庚

○雲林浦屋先生見示新年詩仍次韻却寄

風塵廿歲絕牽絲。獨鎖柴門守舊規。深竹斜連幽隔暗。疎楊半蔽曲池垂。白盞春酒量猶大。滿案新詩才未衰。想見元朝迎賀客。先生頻舉屠蘇卮。

南塘曰前聯流麗後聯切于雲林其人

雲林曰前聯弊家實況上兄之詩有奇趣多謝多謝又曰後聯僕雖不敢當矣竊所希望也故受不辭呵々

懶祭曰前聯先生閒居實景

○夏期休暇同銓弟歸松山途上口占

客味酸辛鄉味芳。不如振袂理歸裝。斜風細雨鵲啼夕。兄弟同車發武陽。南洋曰三四讀去有餘味

○訪武市子峩於永田村莊席上有勝間田知事與近藤南州唱和

因次韻賦贈

六歲重來叩野亭。清談終夕俗懷醒。村無貧戶田園闢。家有良妻琴瑟馨。何必

逃塵君髮綠。未能成志我。紛青。人生隨處存閒地。遮莫浮蹤似水萍。

南洋曰後聯淡窻派口吻

獼祭曰前聯實景實情不得不批

南塘曰僕則未知其實與否唯句之佳亦不得不批又曰後聯句法亦僕所喜故亦呈批

○暑假將終又向東京

又駕長濤向海東。嗟儂身跡似驚鴻。何應膝下得歸侍。弟妹團欒笑語融。

南塘曰真情之語不假巧而有妙味

雲林曰真話作詩一讀悽然

○瀛車中雜詩

西京東去路迂回。沿溯遠山鬱草萊。逢坂關過昨忽豁。太湖一碧接天開。

雲林曰快可想

直從坂府至金城。半日經過十日程。沿道溪山笑迎我。八分舊識二分生。宿日初名

屋古

雲林曰一首中多數字所謂算法詩

參遠野平多戰迹。草埋白骨血痕碧。車窗半日有餘閒。笑罵英雄手頻拍。

○十一月二日同同學諸子遊武州高尾山々距八王子驛二里餘

溪湖幽邃多楓樹得二律次韻

山勢西奔連甲東。峯々矗立欲摩穹。千章黃葉埋溪口。十丈飛湍落澗中。雲載蚊龍帶腥氣。林栖虎豹起淒風。岩頭傑閣知何寺。彫栴華楹映日紅。回首茫茫極海東。絕巔真訝突蒼穹。萬家村邑收鞋底。八國山川開眼中。遺世唯宜喻清氣。登仙直欲駕長風。朗吟酌酒未降嶺。擬見虞淵落日紅。

南塘曰二首連璧其價三十城

南洋曰二首並雄偉

雲林曰前評大然○又曰以寬視之後首輸一籌前首

ゆめ物語

自序

一寸さきは暗の夜にて一足すべれば地獄なり嗚呼人間の
世界はけしつぶほどの大きなるかなその罌粟粒の世の中
に生れて或は笑ひ或は啼き或は怒り或は哀しむも蟻のわ
めきにだもしかざるべし人間のまことに蟻にしかざるか
蟻の人間にしかざるか嗚呼夢の如き浮世なるかなこの夢
の世の中に居りてまた其中の夢を説き其又た夢のなかに
て一寸さきの暗中に空中樓閣をたてならべ喜びあるこそ
誠に癡人の極なれやされどまた之を癡人なりとて嘲り玉
ふひじりもまた夢の世に浮きつ沈みつし玉ふ御方ならん
のみ嗚呼暗中の争鬭夢中のたはと誰かその真相を知らむ

明治二十三年二月十八日

三十二

無始無終樓主人

しるす

ゆめものかたり

無始無終樓主人戯著

或る夜雨いとふりしきりて同し部屋のもとだちは例より早く
閨に入りければ余も共に燈をふきけして蒲團の中にまろ
びぬまもなくひとりのひじり身にしろき綾をまとひいづく
より來たりけん余の枕元に立ちて余を呼び起し余が手を取
りていざ玉へ皆強く待ち玉はんにとて余のいづくに何ゆゑ
に行くかといなみ問ふをば耳にもかけず余をとまひてひ
ろくとしてはてしなき大空を飛鳥の如くに飛び行きぬは
どへたとある家に着きぬこの家は大理石にて疊みたりと覺
しくその建築といひ彫刻といひ今の世のものとはいたく異
りてグリーキの最も巧みなる技術家の手にて作りしものを

ゆめ物語

三十三

見る心地ぞしける家のうちに入りかたへの一間にて待つは
 ぞに大聲にて余の名をよびていでよといふ隅なる戸を開き
 て出でみれば向うは一面の大廣間にて正面に五人のひじり
 皆白き綾をまとひてうつくしきテーブルに向ひて椅子によ
 りかゝり居ぬ右左の兩側に正しく列びたるはいかなる人に
 かとよくみれば洋服をつけたるも漢装からよまひをしたるも大和ぶり
 に装ひたるもあり見しらぬ顔もいと多けれどニュートン、ノ
 アウエプスター、デッケンス、スペンサー、ハックスレーなどは
 さきつころ眞寫などにて見たるとあれば覺えぬたり其外絛
 の袴をはきて扇子を持ちたるは紫式部にやあらん頸の太く
 して顔のしやくみたるはソクラテスにやあらん白き髪かみの銀
 を流すが如きあれば黒き髪熊を欺くごときあり皆一世の通
 儒賢哲なるべけれどその誰たるをしるによしなし正面のひ

じり余にむかひてこのところは學士館と申す所にて學者と
 ならんと思ふものはたれにても皆この試験をうけその試
 験に及第してこそ始めて學者となり學者と稱ふるを許す
 例なれ試験といふも別に問題をい出して之をこゝろむとに
 はあらずたい受験者のすぎこしかたの經歷と行末になさん
 と思ふ事業の概略とをきゝ取りてこゝに玉ふ賢哲たちの
 意見をも問ひて本官がその及第と落第とを判むるとなり御
 身は近頃學者のむれに入らんと頻りに望み居らるゝにより
 て今本館にまねきて定規の通り試験をなすなりその積りに
 て御身の幼少の時より今日までの經歷……成功と失策と……
 ……をつゝます詳しく述べ玉へといふ余は始めてこゝにつれ
 られたる理を知りしばし茫然として途方にくれぬたれどか
 くてあるべきにあらざればうけたまはりぬと答へて余の經

歴をのべたるを次の如し

賢兄文學之才
果有原由
遺傳論不經
也 (南)

余が性質を述べん前に先づ余が祖先の事を少しのべて遺傳の事をいふべし余が皇祖父は若年のころ江戸にいで、昌平費に入り當時名高き鹽谷岩陰野田笛浦など、親しく交り玉ひぬ余か家には今もなほ笛浦より皇祖父に贈りきたりし詩二首ありまた皇祖父の碑文は岩陰に托して五百餘言の長文章を得たり其中には皇祖父の岩陰と共に東海道をたびし玉ひたる様などしるしありされどこの碑文は晩年の作なりけん岩陰存稿中には見え惜むべきとにこそ家嚴は皇祖父の獨り子におはして廿一の御歳に皇祖父かくれ玉ひければその後にはひとりにて家計の困難に當り玉ひ強く艱苦をなめ玉ひぬ家嚴は松山藩校なる明教館に入りて學ひ玉ひぬ其ころ家嚴は眼をやみ玉ひ殆んど明りを失はんとを恐れ玉ひける

此わたりす
べで折焚柴
の記をよむ
ごさし(不)
僕もまたし
かいはむこ
す (彌平)

先生眞是德
行君子余親
先數年常被
知何日得報
萬一(子規)

ほどにてありきそののち家嚴は藩命によりて畿内中國西國など遊歴し玉ひけるが大和にて森田節齋を訪ひしばしその家に留り玉ひ播磨にて河野鐵兜を問ひ其塾に一月餘り逗留して生徒をとりしまり玉ひ又肥後にて木下鞞村を訪ひ經義など論難し玉ひけるのち廢藩置縣のさわぎ起り家嚴は權少參事となり玉ひたれど間もなく仕を辭して久松家の家扶となり玉ひぬ明治十三年家兄のうせ玉ひたるのちはまた家扶をも辭して閑散に日を送り玉ふ家嚴は酒をのみ玉はず又茶湯書畫などを殊に嗜み玉はず又た殺生芝居などを好み玉はず家嚴の愉快をみたすものは宋儒派の哲理と近郊の散歩となり曾て聖人與天地爲一體といふ語を悟り得たりとて手の舞ひ足の踏むをもしろで喜び玉ひたる事ありされどまた經濟の理にうとくおはさで廢藩のときにあたりて士族の産

靜溪先生折
僕爲父執親
失多年詳悉
其學殖德行
非私其親之
言也僕敢保
證之(南)
一家國樂之
狀現于此四
字余等孤子
不堪健羨
(規)

當時ニ立戻
リテ辭ヲ立
テス(南)
トス(南)

を倒し家を失ひたるものは十に八九なりけるにわが家は今
もなほもとのやさしさに住みまた二頃の田ありて饑うる患な
きはみな家嚴のたまものなりかし家慈は常に怡々として鬱
ぎ憂ひ玉ひたると絶えてなくまた老いたるひとの特性とも
いふべきものごとの世話をやくとをたえてなし玉はず余等
兄弟はその笑容温々たるうちにそだてられたる幸なる子供
なりけり
余には九人の兄弟姉妹ありけるがうち二人は過ぐる年うせ
ぬ余は三男にて家嚴の三十五歳にておはせし時家慈の二十
六歳にておはせし時に生れぬ幼きとき乳乏しかりしかば藤
野海南先生の亡夫人に乳を貰ひそのおかげにて人となりた
り初めは肥えふとりたる方なりしが十五六歳より長く瘦せ
たる方となりぬまた五六歳までは多言にてよくしやべりた

個般些事記
而不忘是則
足證害君感
情之深也教
導青年者可
不猛省者乎
(子規)

れど其後いつのまにか口吃るくせのつきて困難いはん方な
かりきそれゆゑ小學校へも十一歳の時に始めて入校したり
是れより先き余は家慈の里方なる竹村といへる家の家子と
なりて姓を改めたり竹村には養父は幾程もなくうせ玉ひて
唯だ八十に餘る老祖母のみおはしけり余は十五歳の暮れま
で小學校にて學びぬ其あひだ級の首坐を占めたる事は多か
らねど六七番より降りたるともいと稀れなりき十六歳の春
より中學校に入りて英語を脩むるとなりぬされど口吃る
によりて便宜いと悪しかりけると入學のはじめABもしら
ぬにすぐ第一讀本を二三章づゝをしへられたると讀本の二
枚目の紙のうせかたるとにて忽ち氣力を失ひ苦み學ぶとの
いやになりぬその後一年半はども中學校にゐたれど英語と
ては少しも覚えし事なく學校にて教師に學びたる所も内に

豊音君乎
(子規)

歸りて書物を開きみたるとなし英語の字引をねだりて求め
貫ひたる字書も引きたることは數ふるほどもなかりきかく
英語にて失敗せしより頻りに漢學を修めんとの念を起し十
七歳の夏より中學校へ行く事を止めたりこの時は恰も家嚴
の久松家の家扶を辭し玉ひて家塾を開き玉ひたる折なりし
かば余は塾長となりて生徒を取りしまる身となりぬこの頃
好みてよみたる書物は八家文と其他の文章類の書物にて經
書はあまり窺ひたる事なし詩は少し以前より作りぬたれど
このころになりて始めてやゝ詩めきたるものを作り得るや
うになりたりこのころ松山の風路舎より風路新誌といふも
のをいだして諸家の詩をのせたりしがその中の懸賞欄とい
へるに余が詩をいだしたるに僥倖にて兩三度甲點を得たる
とありていと愉快に思ひたりこの頃より余は山水の景色を

愛するを知り近郊の山または水など探らぬくまなくそれ
につれて詩文の才も少しは上達したる心地したり十九歳の
ときに東京に出で學ばんと思ひたれど折悪しく皇祖母は病
にかゝり玉ひたれば當分の中は家を離るゝとむつかしくな
りぬこの頃のとまりけん余は孟子論文を購ひ又た左輔など
よみて大に文法を悟りたる心地したり廿歳の春皇祖母は遂
にかくれ玉ひぬこのころは余の交り居たる友だちも多くは
東京にのぼりて故郷にとゞまりぬるものは余ばかりにてし
ば／＼書狀もて余にすみやかに上京せよとすゝひるも多か
りきそのときは余が東京の正岡子清に與へたる書の結末を
左に抄録せん之れをよめばいまも猶當時のありさまをおぼ
ろに想像するを得るなり

僕與足下分袂以來故交寥寥無復足與談者頃者安長松南亦

以書促僕上京僕志愈矣君明春必出鄉取塗於東海道泛琵琶之湖望富士之嶽探遺跡問故墟歷覽古英雄豪傑之所以興亡成廢以豁其胸襟既至都直入名師之門將倣足下所爲庶幾其學少進歟足下以爲何如勿吝教誨

翌年余の廿一歳の春即ち明治十八年四月四日余は塾生たちに見送られ三津港を解纜して上京する事となりぬ當時余は勿論上京して漢學を專修せんとの考にてありきされど余の志望は唯だ漢文をもて名高き重野河田などを凌駕したしと思ひゐたるのみにてなほ深く心の底を探りたらんには余の上京は漢學を修むる爲めと東海道の山水を探ぐる爲めとの二ツより成りたちゐたりいな時としては名所遊びの心修學の心よりも盛なるとさへありて上京の後はいかなる方法にて勉強しいかなる書物を專一によまんなど考へたるとはい

と稀れにてありき今よりそのころの有様を顧みれば實にあどけなきものになんその後余は單身東海道を經て東京に來り斯文齋に入りぬ余は入齋して間もなく古今文粹序といへる課題一篇を作りて出したるに教授岡本監輔氏は其文を評して立論極到無一間句後生僅筆也といひ且つ余に是れまで誰に就きて學びたりやと問はる余はこれまで師に就きて學びたるとなく家塾にありて八家文の講義を聽きたると時々家嚴に詩文の添削を乞ひたるのみにて多くは獨學の身なれば余はあからさまにそのよしを告げたり且つ余はそれまで家嚴の外には他人に詩文など見せたるともなければ余は自らおのれの學力の價值をしらざりきされば始めて岡本氏の評を聞きたる時の心の中の愉快は譬ふるに物もなき程なりきその後ち上岡本先生書といへる文を作り海南先生に添削

君真有文才
(規)

牛馭馬勃敗
鼓ノ皮ヲ拾
善ク用テ拾
テサカハ其
也僕ノ言幸
ニ賢兄ヲ感
シタル亦殆
ト之ト似タ
(南)

を乞ひたれば先生は此篇議論文章求之當世書生中不可多獲
と評し玉ひたれば余はこれより自信の力轉テ強くなりぬこ
のころ斯文鬻の生徒は八十人ばかりあるが人も余を目して
文章家といひ余もまた文章家を以て自ら稱し居たりされど
時世は大に變りて余がそれまで盡したる勤勞は皆水泡とな
り余が滿胸に抱負したる氣力をもぬけはて、余は青山英和
學校に入りて一個の無學なる小兒と化して英語を始めより
學ぶ身となりぬ余の英語を學ばむと思ひ起したる理由はそ
のとき余が作りたる漢學改良論に詳なりそのころ余は専ら
力を文章に用ひゐたれど余の目的は文章にあらずして東洋
の哲理を發揮せんとのとにてありき此の思想の起りたるは
内藤南塘先生の哲學論を聽きて感じたるにありき今
漢學改良論の大意を抄出せんに

從來ノ漢學ナルモノハ其學問ノ區域甚ダ廣大ニシテ其中
ニハ政治モアリ法律モアリ理財モアリ物理モアリ道德モ
アリ或ハ心ヲ脩ムルヲ談シ或ハ産ヲ興スヲ説キ天下
百般ノ事ハ皆漢學ノ中ニアリテ漢學トハ何ヲ脩ムルヲ目
的トスルヤヲ斷定スルヲ能ハザリキ蓋シ上古人民未ダ多
カラズ境域未ダ廣カラズ交通未ダ繁ゲカラズ政務未ダ整
ハザリシ時ニ當リテハ此クノ如キ學問ニテ充分其用ヲ濟
シタルヲナルベケレド後世ニ至リ百事皆紛雜ナル有様ト
ナリテハ此クノ如キ疎陋ナル學問ニテハ充分ニ用ヲ濟ス
ルヲ能ハザルナリ然ルニ後世ノ迂儒ハ聖人ノ道至大無邊
一毫モ加フル所ナシト枯株ヲ墨守シ時ニ從ヒ勢ニ乘シ
テ變ズルヲ爲サバリシヲ以テ今日トナリテハ政治、法律、
醫、理、天文、算數、地理、航海ニ至ルマデ皆西學ニ壓倒セラレテ

之を狭むるは抑之を廣むるものなり
 道義倫理は其國の起源に於て多少の異同を有するべし
 我國の倫理を西洋の倫理に直ちに見せしむる如きは愚
 見の支那道徳學の永く東洋の義の根本たるべき事疑ふべからざるなり
 自漢學者視之則立論新奇規可驚然其說未免偏屈也正

有爲ノ士ハ漢ヲ弃テ、洋ニ歸セザルナシ今ニシテ改良ヲ加ヘズンバ漢學ノ種子ハ遠カラズシテ絶滅ニ歸スルナルベシ改良トハ何ゾヤ則チ其學問ノ區域ヲ狹縮スルヲナリ夫レ漢學ノ最モ長スル所ハ道徳ノ說ナリ道徳ハ漢土ノ數千年來講究シ來レル者ニテ就中宋儒ノ理學ノ如キハ頗ル精密トシテ西洋ニ比シテ恥ザルモノアリ故ニ今ヨリ以後ハ漢學ハ人倫道徳ヲ研究スル學ナリト定メ他ノ政治法律等ハ總テ西學ニ委ネ其範圍内ニ於テ畢生ノ力ヲ極メテ之ヲ研究改良セバ永ク天下ニ用キラレテ絶滅ノ患ナカランカ既ニ漢學ハ道徳學ナリト定ムレバ西洋ノ哲理ヲ攻究シテ之ヲ用ヒ以テ吾ガ道徳學ノ基礎ヲ堅メザルベカラズ又タ耶蘇ト云ヒ佛ト云ヒ皆一種ノ道徳學ヲ含有スルヲナレバ之ヲモ攻究シテ其短ヲ弃テ其長ヲ取り以テ吾道ヲ補翼

是君出役中
 進一歩處
 (千規)

セザルベカラズ此クノ如クシテ始メテ之ヲ完全ナル道徳學ト云フヲ得ベキノミ

智識は權利
 なるは學者
 の空想に過
 ぎず此確言
 の實際に行
 はるは時行
 至らば世界
 は完全圓滿
 なるなり
 (不)

青山にとゞまると二年半計りにて稍や西歐文物の隆盛にして學術の深邃なるを窺ひ是れまでの見識のいと狭かりしとを知りて漢學を庇護する心はやう／＼に衰へ行きぬこのころ余の心に感觸を興へたるものは智識は權力なりといふ説は非眞理なりといふ觀念にてありき (Syton 氏の Night and Morning) といへる小説は智識は權力なりといふことを打ち破りたるものなりとか聞きたれど未だ讀みたるとはあらず或る人は智識は人に勇氣を興ふるのみにて智識は即ち權力なりとはいひ難しといひけるが誠にさる事にて世の中の有様をみるに智識ある人の説は必ず行はれ智識ある人は必ず尊ばれるにあらずして實力ある人の説行はれ實力ある人尊ひ敬

36920

る今日い
おほつか
くおしは
る(規)

理論通り
行はれぬ
理論の粗
るか爲な
べし實際
相違する
論は理論
して許す
からず(不)
哲學云其
然豈其然
(南)

はる、風なり語を更へていはば世の中の事は理論通りに行はれずしてまゝ理論と異りたる方角に向うて進むものなりされは近き世に至りて獨逸などにては何事をも歸納的に歴史的に攻究する流義盛に行はれて經濟學、法律學、政治學などは更にもいはず哲學なども歴史的に攻究することなれり余はこれ等の事を知りてのち始めて歴史といふものゝ性質價值などを知りて歴史を修めたく思ひ始めたりされど余は歴史を専門に修めんとまでは思はで唯だ日本の歴史を少し研究したしと思ひるたるのみ然るに廿二年二月に至り英和學校に或る事件起りて余は已むを得ずして夏休み以後は退校すると定めたりさてその後は獨りにて靜に修學せんかまたは他の學校に入學せんかとの二ツの問題に付き十中八九まで獨學と決心したれど人々のすゝめによりて遂に同じ

始開大知覺
(規)

大過ナシト
云フハ小
過ハアヲ
モノト知
ル意外々
(南)

年の七月より大學撰科生となりぬその時余の國文科を撰びたるは別に深き思慮ありてにはあらずたゞ次きの二ツの事情に牽かれてのとなり(一)國文科なれば余は全科を修むるを得べく同じく撰科生となるならば一二科を修むるより全科を修むる方利益多かるべし(二)國文科にては兼て望み居たる日本歴史を研究するを得べし、その頃の余の志望はかくおぼろげなるものにてぞありける余は國文科に入りてのち始めて國文の攻究するに足るべき價值あることを知れりかくて余は今猶國文一年の撰科生となり居るなり余は平生酒を飲まず煙草をたしまず今日に至るまで品行の上に大過をなしたるとなし余は芝居相撲其他の興行ものを皆好みりされど學資の乏しきため屢々其地に立ち入りたるとなし此く述べ終りたればひじりのいはく御身のすぎしかたの經

歴はいと詳に知りぬこれよりは御身のゆくすゑになさく
欲する事業の概略を述べ玉へといひければ余は虎に騎りた
る勢にてえいなみもせず現今の余の志望を陳べたると次の
如し

是まで余の志望はしばし更りたり始めには余は文章をも
て世に立たんと思ひ次ぎには東洋哲學を發揮せむと思ひ其
次ぎには歴史の效用を悟りまた其次ぎには國文國語の價値
を知りたりされど余が東洋哲學を改良せんと思ひたる時に
は余が目的は全く文章の方を去りて哲學の方にのみ移りた
るにあらず唯だ前の目的に哲學の分子を注入して文章とも
就かず哲學ともつかぬ方角に向ひて余の進路を取りたるな
りけり余が歴史の嗜好を知りたる時もまた以前の二ツのも
のに歴史の分子を注入したるのみなりき譬をもていはば異

啓得的切
(南)

於自己身上
觀察到此賢
兄既入哲學
之室久矣
(南)

これいはゆる
日本のフ
イロキ
にこそ(不)

方向の二ツの勢力相會して第三の勢力を生ずる時は其方向
は前の二方によりて作りたる長方形の對角線を行くが如
く余が將來の志望もたゞこれまで余が腦中に印したる智識
即ち文章、哲理、歴史、國文、國語などの混合化同してなりたるも
のの方角に向ひて進まではかなはずたとひ余は他の方角に
進みたく思ふとも自然の道理に制せられて余は他の方向に
引く事能はざるべしされば試みに右の四ツのものを混合し
て各個の連絡をつけ一ツのものとなし見るに「國文、國語を歴
史的に排列して之を哲理的に研究すると」なり即ち之を一學
科として名づけ見れば日本文學史とでもいふものとなるな
りされど歴史の分子を少し澤山加ふれば歴史哲學ともなる
べく哲理の分子を澤山加ふれば審美學ともなるべく國文國
語の分子を澤山加ふれば言語學ともなるべし余は昨年大學

世人敬曰丈
夫立志百折
不撓萬死不
變自以爲得
何頑也賢兄
此言知音果
幾人(南)

所志也大
(子規)

文章より哲
學史著より
歴史歸着す
る所は途に
國語なり吾
兄が愛國の
心之をこし
然らしむの
み(不)
この字書を
完成せんに
は百餘の學
科に通曉せ
ざるべから
ず吾兄其れ
之を(不)
更に説く事
をやめよ香
已に其必要
なるを知れ
り願くは驛
尾に附して
只其道を開
發せん(慶)

に入りたるのみにて未だ一年も経ざるとなれば今より余が
畢生の間に作し盡すべき事業は右四ツのうち何れなりやと
定めんといかたきわざなり今假りに定むとも後ちに更る
となしともいひかたければ強ひて定むるの必要もなかるべ
し。

されど余が畢生の中に必ず成しとげたしと思ふ一事ありそ
は Murray 氏の New English Dictionary on historical Principle に倣ひて
歴史的日本字典を著はさんと思ふとこれなり歴史的日本字
典とは則ち今日日本に行はれ居る國語、或はふるく日本に行
はれ居たる國語の意義、起源、歴史などをしるす字書なり猶細
かに之を説けば(一)即ち各の語はいついかなる形にて、いかな
る關係にて日本語となり、すでに日本語となりてのちは、形と
意義とに、如何なる發達をきたしたるやなどを説きあかすな

り(二)此等の事をあらはすには古き時代より今日までの作家
の用ひたる用例を抄出して之を時代の順に列べ其語の形ち
意味などの變化せるさまを示すなり余はかくの如き字書こ
そ今日の日本否むしろ後來の日本に大なる必要あれと信ず
るなり
何故に必要なかといふとを説きあかさんには先づ博言學
即ち言語學の必要なるをいはざるべからず博言學とは言
語を研究する術にて古文學クラシカル・フィロロジなどは言
者のグリーキ、ラテンなどを攻究するはそれによりて古代の
英雄の思想、社會生活の有様、風俗、習慣などを知るために攻究
するなりされと言語學者は言語をばかく方便メイシスとして研究す
るにあらずして言語其物を研究するなりすなはちその意義
性質、沿革などを研究して言語が有する一定の原則を發見す

して始めて
其先導者た
るなうべき
のみ(不)

我將甜目待
其上梓時
(子規)

材料ともなるべき疎末なる字書のできて少しにても後の學者を利するとあらば余は満足するなり
かく余が述べ終りたる時ひじりは何事をか余につげなんとせし折りしも友の余を呼ぶ聲に目を開きみれば是れなん南柯の一夢にて夕の雨はいつの間に晴れたりけん日ははや高くさし升りて庭の梅が枝に鶯の鳴く聲いと清らにぞきこえける

一篇自序寫出精細且有一托夢之事則結構亦不凡○君初心醉漢學後入大學而後悟國文之爲何博言之爲何恰如南柯夢覺而日射東窓梅花枝上聞黃鳥聲其快可想

明治庚寅二月中院

蔗尾道人子規妄評

夫れ夢は五臟のわづらひなりと云へ共強ち皆々然るに非ず其が中にはまたかの正夢と云ふものあるは古も今も人のゆるす處にしてゆめく疑ふべきにあらず我兄一夜南窓の下に夢を結び賜ひ醒てこゝにゆめ物語となん云へる書きものをものせられぬ今これを開き見るに兄が過去の様未來の事など例の健腕もていと面白く綴られたりこれぞいはゆる一の正夢にて兄が遠大の志を遂げかの學者の群に入りかの大字典の著述を爲すもあへて遠きにあらざる可し余は只すら首を延して其正夢のいつはりなきをまたんあな頼母しき正

夢かな

六十

明治庚寅春二月中院

飄々堂主人謹書

兄ノ此物語ハ夢ニ託シ自家ノ心事ヲ吐露セラレタルモノナリ故ニ本篇ノ眼目トスル所ハ實ニ後半ニ在リト信ス兄ノ志望ヤ斯ノ如ク其レ遠大ナリ日本語ノ字典ハ廿世紀ニ達セスノ出現スルノ期アルヘシ余ハ刮目ノ之レヲ待タント欲ス余カ此ノ篇ニ對スルハ小説的ノ眼光ヲ以テスルニアラサルカ故ニ字句又ハ文章ノ構造等ニ就キテ喋々スルノ必要ヲ見ス且ツ又兄ノ意思ニアラス故ニ余ハ唯兄カ將來ニ大望ヲ有セルヲ稱スルノ餘、數言ヲ茲ニ記スルノミ

明治廿三年三月八日

五洲生識

一部言志錄名之爲夢何也曰托之也蓋君子言必履焉唯其未能履不得不難言所以托諸夢也雖然進一步而論之人生百年無非

夢也昨稱全歐之霸今爲孤嶋之囚朝按麀裳之舞夕化馬嵬之士英雄美人倏來忽去豈非夢乎若夫如是觀則吾人之志業其成夢也不足喜也其不成夢也不足悲也安心於成敗之表忘情於喜悲之外惺々乎以了百年是謂之大覺者耳乃僕所望賢兄者在于此賢兄果肯諾否抑僕此言要亦夢也請勿於痴人傍邊說之至囑至囑

九月念三

南塘老客讒言

夢物語一篇拜讀しぬこれ主人か家に藏して後の主人たるもののにのこさんとして物したまひしならむそをわか見るを得たるは幸とやいはむ

國語の字書あむこと目下の急にしてまた實に男子か血を漦きて當るへさわざなることをたしかに知り得たり主人は深沈にして事にあつき性なれば完成の日あらむこと期して待

つへきなり

主人か志のうつり變りたるさま見るに文章より哲理哲理より歴史歴史により國文國語に移りゆき遂に混同してこの業に注ぎ來たりたるを知る我は更にこれを混同分子の一となし了ることなからむを望むそはこの業の主人をおきて待つこと能はされはなり

辛卯三月はしめて黄鳥の嘯するとさして

星 川 安 言

今の世に當りて爲すへき事業いとく多きが中に國文學の原野は就中其荒蕪を極めたり今吾兄大憤を發して斯不朽の業に志す壯なりといふべし僕亦君兄と志を同うするもの願くは驥尾に附して千里にいたらん

明治二十四年三月十五日

不欲速齋主人拜讀

親友竹村君の夢物語一宵の燈下にことごとくよみをはり申候て唯に憾佩の外無之候小生も同じ道にたつさはる志なれば之よりともに其あれ地をたがやさん事こそ望ましく候也

如 來 生

過去は現在に及べり以て將來を推さは將來のと豈必ずしも期しがたからむや

一部夢物語半生の經歷を叙して復餘蘊なし微意の存する所それ此に在るか

歲月匆匆六裘葛この間國文の勃興比なしと稱す然りこれを編著にみるもその量に於てはまことに春郊の緑の如し知らずその質に於て冬野の落莫たるに似ざるを得るか如何に辭書に至りては余輩唯一部言海を得たるのみ而も其書は謂はゆる普通辭書にして兄の謂はゆる歴史的辭書に非ず天の竊

に待つ所あるを見るなり思ふに此業たる一人一世にして完成を期すべきにあらざると實に兄の言の如し稿本世に出づる日は恐くは兄が白頭の時に在らむ兄嘗て著述の難きを論ず當時深くその意を解せず今に及びて始めてこれを會しぬ

丙申一月

辱知彌平拜讀

辭書編纂業の進歩及び吾が國現時の辭書

文明の東漸してより吾が社會の事物は日に月に改良進歩の途に上りて、歐米人が文明を、白哲人種の專有物なるが如く、誇稱せしは黃梁一炊の夢となりたり、醫學の如きは、獨逸を除いては、世界中また吾が國に及ぶものなく、陸海軍制の整頓せるまた歐州諸強國と比肩して愧ぢざるに至れり、然れども他の方面に於いては吾が進歩の度なほ遅緩にして、空しく歐米人の後塵を望むに過ぎざるものあり、文學の如きは即ちこれなり。

文學の中に就いて、仔細に之を討尋するときは詩歌の形式の如き、文法の諸條規の如き、なほ學者の研究もしくは論諍中にありて未だ定説を得ず、其の他久しく學者の鑽研に待つあつて未だその答案を得ざるもの多く、正當に言はば、吾が文學は未だその形體をも十分に具へざるものなり。之を歐米の業に已に整頓せるものに比するときは、恰も基礎を

も固めずして建たる藁葺の假小屋と巍然として雲に聳ゆる煉瓦石造の家屋との如く、その差は實に非常なるを見る。而して吾が辭書も亦その一に居るなり。

吾が辭書の最も古きものは源順の和名類聚抄なるべし。和名抄の結構は事實辭書と和漢對譯辭書とを混合したるが如きものにて、その記載事項も廣からず、その語數も多からずと雖も古典研究の爲めには、今日と雖もなほ有力なる據典たるを失はざるなり。源順は村上天皇の天曆中梨壺五歌仙の一人にて、今を距ること實に九百十五年なり。吾が辭書の起源また遠からずとなさず、これをグリーキ最古の辭書編纂者として知られたるゼノドタス、アリストフニス等に比するときは、我の後るゝこと固より非常なれど、之を今日文化の淵藪と目せらるゝ獨佛英米等に比せば、則ち如何九百年前に於ける諸國の形勢を回想せよ。その文學はさて置き、その國すら未だ存在せざりしものあるにあらずや、而

して今日の進歩は彼我全く地を易へて、我却てその後を瞠若たらざるを得ざるに至れり。請ふ少しく歐米に於ける辭書編纂事業隆運の一斑を窺はしめよ。

社會の進歩して、萬般の事物益々複雑に赴くに從ひて、自家の専門の事業を研究するが如くに、他の各種の事物を一々研究する事能はざれば、簡短なる方法によりて、各種の事物に關する智識を收得せんとする希望を生ずるは自然の趨勢なり。この希望を充たす一手段として、各種の事物に關する専門辭書の編纂を促す事頗る急なり。されば歐米各國に於ける専門辭書の夥多なる實に意想の外に出づるものあり。ボンソンピ、エー、ライオンズ氏の記する所によれば、各種の専門に屬する辭書は益々その數を増して、その主なるもののみを擧ぐるもなほ左の多きありと。

傳記辭書	地質學辭書	スタチエート辭書	工學辭書
地理學辭書	礦物學辭書	民法辭書	機械學辭書
書籍辭書	建築學辭書	刑法辭書	手工辭書
哲學辭書	繪畫辭書	政治學辭書	考古辭書
數學辭書	音樂辭書	社會學辭書	年月辭書
博物學辭書	醫學辭書	農業辭書	系圖辭書
動物學辭書	外科學辭書	農業經濟辭書	紋樣辭書
植物學辭書	解剖學辭書	園藝辭書	畧語辭書
禽鳥辭書	病理學辭書	商業辭書	證書辭書
樹木辭書	生理學辭書	航海術辭書	花押辭書
花菓辭書	外交術辭書	馬術辭書	年表

この外になほ漏れたるもあるべく、又セクスピア辭書等一個人の著述に關する辭書もありて各種の事物に就きての専門辭書は殆どあらざるなし。

顧みて吾が國の現状を見よ、専門辭書は近年に至りて、僅に『哲學辭書』、『物理學辭書』、『動物學辭書』、『植物學辭書』、『工學辭書』、『化學辭書』、『醫學辭書』等の六七種を得たれども、皆不完全なる英和、獨和等の對譯辭書に過ぎずして、一も國語を以て精密なる解釋を加へたるものなきは實に口惜き次第ならずや。

辭書の進歩は、かく一方には専門の分類益、精密に赴くと共に、他方に於ては、普通辭書中に成るべく、多く各種の語を收めて、一書にして各種の希望を充たさん事を務むる事となれり、則ち術語、職語、古語、新語、俗語、蠻語、方言、流行語、小兒語等の特殊の階級、職務、事業に屬するものも、すべて一様の待遇と注意とを以て、漏さず収録して、編纂者の私意を以て取捨を加へざるに在り、佛國の學士院に於て始めて編纂せし辭書には、全く術語を載せざりしが、其の後フレチエール氏の辭書には、術語をも載せて世人に歡迎せられたるを見て、第二版以後には、餘義なく總べての語

を登載する事とせりといふこの一事によりても辭書が如何なる方面に進歩しつゝあるかを知るに足らん。

而して辭書の進運は今や更に一步を轉じて、かく各種類の語を悉く収集し、配列して、その語原を探り、其の意義を精確周密に解釋し、用例を擧げて、これを證明するを以て、辭書の能事畢れりとなさず、なほその語に關する事物の性質、效用、由來等を成るべく精密に記載し、一見して、百科全書的知識を得しめんと勤むる傾向を生せり。ウヱブスター辭書は從來英語辭書中の翹楚として珍重せられ、今日に至るも、なほ其の勢力を失はざる事は皆人の知る所なり。請ふ吾人をして少しくその發達の歴史を窺はしめよ。該辭書は西曆一八二八年(今より七十年前)始めてコンネクチカッド州のニューヘブロンに於て出版せられ、一八四〇年に至りて一たび訂正を加へ、一八四三年に附録を添へたり。されどその時は、圖畫すらも未だ挿入しあらざりき。一八五九年に至り第二回の訂正を加へ、多數

の圖畫を添へて出版せしに、大に喝采を博したりしが、米國にて出版せし辭書に、圖畫を加へしはこれが始めてなりき。この出版の好評に力を得て、全體に大訂正を加ふる計畫を立て、幾多知名の學者を聘して、多くの新奇なる材料、圖畫を加へ、有益なる地理、歴史發音表等をも添へて、從來の乾燥無味なりし辭書を、最も興味あるものとなして、一八六四年に出版したり。この出版も亦非常の好評を博したりき。かくて一八七六年に又新たなる附録を添ふると同時に、第四回の大訂正を加へん事を企て、多數の専門學者と熟練なる助手とは種々の困難を忍びて、遂に一八九〇年の最近の訂正を成就するに至れり。編纂者自ら當時の事情を述べて、曰く『科學、藝術等の語の収集と解釋とは、特に力を費し、かば、批評家等は、文學的ならすして全く専門的なる語に、かくまで多くの領分を與ふる事を兎や角論じたれど、それもたゞ一時にて常に坐右に備ふる辭書には、科學の發見、新事業の成功等に關する語は、特に精密なる解

釋を附して必ず収録せん事を時勢は遠慮なく促すを發見せり」と、また以て辭書の進運をトするに足らざらんや。

時勢の進歩は一日も停止することなく爾來幾多の大辭書は續々編纂せられて、センチリー辭書出で、スタンダート辭書出でたり、スタンダート辭書はニーヨークなるフンク、エンド、ワグナル會社の編纂せる所に於て、組織、體裁等に於て、一種の異彩を放てり。これをウヱブスター辭書に比する時は、蓋し伯仲の間にあらん。センチリー辭書は同じニーヨークなるセンチリー會社が、博言學の泰斗なるホイトニー博士の監督の下に編纂せる所にして、その解釋の精細に、學術的にして、材料の豊富なる、實かにウヱブスター、スタンダートに超えたり。而してセンチリー辭書に至りては、益、その百科全書的傾向の著きを見るなり。試に一例を示さんか、*line* (旋條銃) の條を検するに、ウヱブスター大辭書には旋條銃の全部のの 小き疎圖を擧げ、解釋も簡短にして、語原の説明と共に僅に、十一行を

費せるのみ。然るにセンチリー辭書は旋條銃の爲めに、一頁(凡そ三百三十行)と七十七行とを供し、その各種類を擧げ、局部の精密なる解剖圖四個を掲げて詳細に説明せり。又その解釋の中には、五十八行に互れる旋條銃の沿革史をも擧げたり。

又今方にロンドンにて出版せられつゝある歴史主義に基ける英語辭典は未だ完結せずと雖も、その豊富、整頓等に於ては、センチリー辭書の下に在るものにあらざるが如し。執近英米に於ける辭書編纂の進歩は實に人をして驚嘆せしむるものあるなり。

請ふ吾人をして少しく吾が辭書の進歩を尋ねしめよ。維新以前のものは姑くこれを措かん。近年普通辭書として世に出でたるは高橋氏のいろは辭典(明治三十一年)を以て初とす。これより前に、近藤氏の言葉の園、物集氏の言葉の林など出でたれど、普通辭書と稱せんより、寧ろ雅言専門辭書たるが如き傾向あれば、今はこれを批評の繩張の外に置かん。い

ろは辭典に次いで出でたるを大槻氏の言海、山田氏の日本大辭書とす。其のうち稍、暫く辭書の出版を見ざりしが、明治廿九年の末に至り、大和田氏の日本大辭書と藤井、草野兩氏の帝國大辭典と殆ど時を同じうして出でたり。吾が國現時の普通辭書として見るべきものは以上の六種なるべし。その數よりいふ時は決して少しどなさずし。かも何れも皆大辭書を以て自ら居るもの請ふ吾人をしてその果して大辭書と稱する價値ありや否やを檢せしめよ。

先づ高橋氏のいろは辭典より始めんか。この書の廣告には、語數十萬餘と號しあれど、實際は七萬前後なるが如し。而してその中には、人名地名等の固有名詞、又は「くわんじゆん(慣馴)」、「くわんくわ(護讎)」、「くわつかん(厝姦)」、「せんたう(踐倒)」等の不熟なる、もしくは不必要なる漢語等を多數に含み居れば、これ等を除き去る時は、その語數は非常に少なきことなるべし。この書の著き缺點は、語の選擇に一の標準の存せざること。

これなり例へば

『泰晤』『補入臣』『美土代町』『眞差町』『菊阪町』

等を擧げて、

『正成』『正行』『小野小町』『松山(備中)』『吳(軍港)』

等をあげず、又東海道の驛名にても、

『御油』、『舞阪』、『見附』

等を擧げて、

『袋井』、『新井』、『二川』、『赤阪』、『有松』、『福田』、『前須』、『庄野』、『關』、『土山』

等を擧げざる類、何の理由によりて、かく其間に取捨を加へたるか、もしこはた、選擇の疎漏にして、取捨を加へたるにあらずとせば、實に甚だしき疎漏といはざるべからず。而してなほこれより甚だしきものあり。『古今集』はあれど、『新古今集』も、『千載集』も見えず。

『日本書紀』、『六國史』、『源氏物語』、『太平記』、『八犬傳』

などはなほ更見えず實に奇怪なる選擇法といふべし。この書の他の著き缺點は解釋の部にはたい同意語を並ぶるのみで多くは眞の解釋語を加へざるに在り例へば

くがぢ(名)

陸路をかぢくがみち。

そにん(名)

訴人原告うつたへにん。

うま(名)

馬(牡馬一名父馬、牝馬一名小馬(動物))

ふれにのる

乗船、搭船、上船、ふれにのる。

れんぜん(副)

漣然(涙の流るゝ貌)、さめさめ。

の如し而して稀に「涙の流るゝ貌」などの如く、解釋語とも視るべきものあるは却て皆括弧内に入れて本文として取り扱はざるが如きは、何の謂たるを解する能はずこれ果して普通辭書同意語の辭書に非ざるの體裁に缺くる所なきを得るか其の他「ふねにのる」等の句を單語と一様に載せたる已に奇なり又「毎週」「毎夕」「示價」「絃歌」「腹中」「管船局」等の語には一も(名)(形)等の語の分類の符號を附せざるは更に奇ならず

や。

要するにこの書の特質は蕪雜にして統紀なきに在りこれを節用集の稍進歩したるものといはば吾人はその進歩の大なるに感せずんばあらず然れどもこれを以て「この編纂法たるや期せずして天下の「新字典」と合符せるものなり」と誇稱するに至りては僭妄も亦甚だしといはざるべからず。

物集氏の日本大辭林は言海よりも後に出でたるものなりしかも宮内省の命を蒙り御歌所長高崎正風氏の監督の下に編纂せられたるものなればあつばれ皇國の大辭典として文壇に大なる裨益を興ふべき筈なり然れどもその實は吾人の希望を充たす能はざること多く古語の稍多く収集せられたる事を除きては解釋の不明なる所といひ術語の缺けたる所といひ整頓の不十分なる所といひすべて言海に及ばざる事遠しといふべし。

大辭林の特質は成るべく漢字漢語を用ひずして解釋を試みんとしたるに在りこれ大に編纂者苦心の存する所なるべし然れども普通辭書として其の解釋中に今日普通に行はれ居る漢語漢字を避けて用ひざる必要いづくにかある物集氏のこの舉は蓋し古來の國學者が非常に漢字漢語を卑みし弊習に知らず識らず感染せしより起りしにはあらざるか然れども氏は一方に於て『勤勉』『強記』『虛威』『許容』『感涙』『罪狀』等の漢語を多く収録する事を避くる能はざりきかく一方には避け、一方には收むこれ果して矛盾にあらずといふを得べきか吾人の疑なき能はざる所なり。

氏は成るべく漢語漢字を避けんとしたるより往々今語を説くに古語を用ふるが如き冠履顛倒の奇觀を生じたり試みに二三の例を擧げんか。

さいしゆつ(歳出)

としくのいりゆ。

さいにふ(歳入)

としくのされもの。

かうだん(高談)

けだかきものがたり。

かうだん(講談)

ふみのこいるのものがたり。

じんばう(人望)

よせひさのおもひよせ。

しゃしん(寫眞)

ものかげをふのごきうつしとるをいふ。またそのうつしきりたるものなもいふ。

何ぞその解釋の奇異なる吾人は殆どその一種の滑稽にあらざるなきかと恠むなりこの他古語を解くにもなほ古語を以てして意義明了ならず徒に使用者を困らす事多し例へ『みけ』の條に。

みけ(御餉)

ぐこおしの。

とあり使用者は恐らくは『ぐこ』おもの』の解釋にては了解する事能はざるべしされば今一應『ぐこ』もしくは『おもの』の條を検し見る事ならん而して『ぐこ』といふ語は収録に漏れたるにや大辭林のいづくを捜すも見出す事能はずされば使用者は已むを得ず『おもの』の條を検して

『ごせん』あさゆふのくひもの『朝夕と限りたるは受けがたけれど』などの解釋を得て、始めて『みけ』といふ語の意義を會得する事を得べし。されば『みけ』といふ語を解するには三段の手續を費さるべからず。凡そ辭書に尙ぶ所は成るべくその解釋の語を平易にするに在り。而して大辭林は即ちかくの如し。これ果して辭書の任務をよく盡したるものといふべきか。

又『おんゐん』の條に、

おんゐん(音韻) おんさゐんさゐんさゐんさゐんさゐん。

とあり而して『おん』の條には、

おん(音) こゑ。おと。ひらき。もじ。ゑ。

とあり『こゑ』の條には、

こゑ(聲) おと。ひらき。み。の。こ。い。る。に。し。る。も。の。

とあり又『ゐん』の條には、

ゐん(韻) よぶこゑにひかれていづるひらき。

とあり『ひらき』の條には、

ひらき(聲) おきのなごり。おきのつたはり。またたき。おきをもいふ。

とあるのみ。今假りに文典の卷頭に於て『音韻』といふ語に逢着してこれを檢べ見るとせんに、たいこれ等の解釋のみにては音韻とは如何なる事なるか。漠然として要領を得る能はさるべし。人或は曰はんかゝる學術に關する事項に就きて、大辭林等に満足なる解釋を望むは、望むもの非なるなり。これ或は然らん。然れども忘るゝ勿れ。この言たる陽に大辭林を回護するが如く見ゆれど、その實大辭林の信用の如何に乏しき事を表白せる反語なることを。

されば古語の収集に向て、大辭林が如何ばかりの完全に達し居るかを。見ん。大辭林中には『ぬきいれで』『けまはし』など今川大草紙、宗吾大草紙などに見ゆる語を載せて、その出所をしるせる事多ければ、試みに宗吾

大草紙を取りて、その語類の如何程まで収録せられたると見るに

- さんこん(三獻) いそ(琵琶の名どころ) くるたち(黒太刀)
- はれやく(晴役) ふかふかと(深々) しらたち(白太刀)
- れうじ(聊爾) いせみやうじ(伊勢苗字) そくいひ(續飯)
- わんめし(碗飯) いりはな(入初) つかがしら(柄頭)
- まへきらめき あがる(食) つかぐら(柄口)
- くるまびやうぶ(車屏風まんかん(蓋の點心)) つのきは(角際)

の類、収録に漏れたる語は殆ど枚擧するに遑あらず。これも亦恐らくは理由ありて選擇を加へしにはあらで例の収集の疎漏にあらざるなきを得るか。

古來の辭書編纂者中には、往々古語、術語等自身の了解する事能はざる語はすべて省きて載せざるものありき。これ私意を以て肆に國民の言語を滅殺するものにて、決して忠實なる辭書編纂者のなすべき事にあらず。もし難澁にして了解する事能はざる語ある時は、解釋を闕きて識

者の補正を待つて可なり。現時の辭書に漏れたる語の多きは、収集の疎漏に基くもの固より多かるべしと雖も、こゝにいへるが如き原因よりするものまた多少はこれあるが如し。吾人は敢て辭書編纂者諸氏が全くこの弊習を捨てん事を望むなり。こはひとり大辭林に就いてのみいふべき事にあらざるも、事に縁由あるを以て、こゝに述べたるなり。

以上の評論によつて、大辭林の價値は畧ぼ明なるべしと信ず。宮内省が辭書編纂の爲めに、巨資を擲ちたるは誠に美學と稱すべしと雖も、大辭林の如きものがその藏版たるに至りては、吾人竊に宮内省の爲めに之を愧づ。

言海は大槻氏が多年苦心の結果出版せられたるものなれば、他の辭書とは自らその撰を異にせるものあり。その體裁の整へる、解釋の多くは論理的にして精確なる意義の變動に従ひて、解釋に一、二、三等の符號を附して區別せる語の傍に發音の符號を加へたる語の古雅、俗等の種類

によりてそれの符號を加へたる。外來語を多く載せた。等は本書の特質として稱揚すべきものなるべし。而してこれ等の多くは西洋辭書に倣ひたるものにて、氏自身の意匠より出でたりと見るべき所は甚だ少きが如くなれど、兎に角に氏が首唱の功は没すべからざるなり。もしこれ等の點を以て高橋氏のいろは辭典、物集氏の大辭林と比せば、言海は恰も小兒の群中に立てる巨人たる觀あり。

然れども言海にも亦缺點多し。その古言雅言の収集甚だ少くして、中學校生徒が國文讀本を讀む時に逢着する語にてだに、言海には見出し得られぬが多きこと。その一なり。又近松、西鶴等に見ゆる『きづまり(氣詰)』『きにようばう(生女房)』『きょうで(利腕)』『きもの(聞物)』『きどくづき(奇特頭巾)』『しさいもの(仔細者)』『しゝおき(肉置)』『じだいおやち(時代爺)』『しきがね(敷金)』『したたるし(舌緩)』をがみうち(拜打)の類大抵載せあらし事その二なり。又今日普通に新聞雜誌等に用ひらるゝ漢語の

過半は収録せられざる事その三なり。この第三の缺點はひとり本書のみならず他の辭書にも共通する所なれども未だ本書の如く甚だしきはあらざるなり。試みに左にその一斑を示さんか

- | | | |
|-------------|--------------|-------------|
| くわがく(科學) | きりよく(氣力) | きよくたん(極端) |
| くわんれい(慣例) | こうぢやう(工場) | きんしがん(近視眼) |
| がくし(學士) | こうば(工場) | しゆみ(趣味) |
| がうくわ(豪華) | めんくわん(免官) | しゆじんこう(主人公) |
| がうしや(寮舎) | ゆし(諭旨) | らうどうしや(労働者) |
| はいく(俳句) | はふてん(法典) | らうれつ(陋劣) |
| せんたう(戦闘) | はふり(法理) | たうぎ(討議) |
| せんたうかん(戦闘艦) | たうた(陶汰) | ついらく(墜落) |
| けいさい(輕罪) | きうさい(救濟) | けいさう(輕燥) |
| きやうぐう(境遇) | げんしやう(現象) | せいかう(性行) |
| せいかい(政界、政海) | りやうせいばい(兩成敗) | えんけん(厭倦) |

これ等の語は今日の教育ある人士の談話もしくは文章中より一日たりとも除き去る事能はざる必要なる語ならずや而して言海は悉くこれを漏せり或はその漏れたるもの、餘りに多きを見て言海は一切の漢語を省きて載せざるにはあらずやと疑はん然れども言海には『じやうが(嫦娥)』『せんゆ(借踰)』『せんぱく(阡陌)』かうとく(高德)』『ざんこう(譚口)』『こんよ(坤輿)』等の稍普通ならぬ漢語すら載せある事を知らは、この辯護的の疑惑は空しく氷解すべし而して言海の價值これが爲めに大に減殺せらるゝを免る能はざるなり。

吾人はこの際に於て、ヘボン氏の和英辭書を一顧する必要あるを思ふ。氏の辭書は主として談話語を収集せしものなれば、言海等と多少その趣を異にするものありと雖も前に挙げたる語は大抵氏の辭書に採録せり我國に於ける屈指の大辭書にして、一外人の手になりし和英辭書に載する所の語をだに載せざるは豈に吾が辭書の體面を潰すものに

あらずや。この非難はひとり言海のみ受くべきにあらず、物集氏の大辭林を始めとして、山田氏の日本大辭書、大和田氏の日本大辭典、藤井草野兩氏の帝國大辭典等皆ひとしくその責を追ふこと能はざるなり。請ふ更に眼を轉じて、センチリー辭書スタンダート辭書等が如何に語の収集に力を盡せるかを觀よ。吾人は喋々としてその博搜哀集を稱すること能はざる、唯だ左に一例を擧ぐるを以て足れりと思ふ。スタンダート辭書には、

- | | | |
|-----------|----------|----------|
| つば(鰐) | ほらきり(腹切) | いけもの(掛物) |
| つが(梅) | ほうす(坊主) | やままゆ(山繭) |
| こと(琴) | みかど(御門) | くわぞく(華族) |
| らうにん(浪人) | こばん(小判) | しぞく(士族) |
| さみせん(三味線) | かこ(駕) | しんたう(神道) |
| まきもの(巻物) | かき(柿) | けやき(榎) |
| かたかな(片假名) | かみ(神) | まつ(松) |

ひらがな(平假名)

しか(鹿)

くろしほ(黒潮)

えん(圓)

さりの(鳥居)

の如く多くの日本語を載せたり。センチリー辭書また『鳥居』を除く外皆これを載せ、ウヱブスター辭書またその過半を載す。これを自國語だに満足に収集せざる吾が辭書に比せは即ち如何而してこゝに擧げたる語の中にも物集氏の大辭林には『くろしほ(黒潮)』と『えん(圓)』を載せず。その他言海以下屈指の辭書亦皆『えん(圓)』を漏せり。吾が辭書編纂者こゝに至りてなほよく其の面目を保つことを得るか。

請ふスタンダード辭書に載せたる日本語に就きて、彼我辭書の解釋に如何の差違あるを見ん。試みに『じんりきしや』といふ語を検するに。

スタンダード辭書

「日本にて廣く行はるゝ人を乗する二輪車にて、彈バネと母呂ハコとを備へ、一人又は二人にて曳くもの。一人の車夫、二女子を載せて曳く圓を出せり。」

センチリー辭書

「(前の解釋と大同小異なり。圓は二人にて曳く者を出せり。)

いろは辭典(高橋)……人力車、(人の挽きて走る車)

大辭林(物集)……ひとをのせてひきのひくくるま。

言海(大槻)……人を載せて人力にて牽く小き車。

帝國大辭典(藤井、草野)人を乗せて人の力にて挽く車をいふ。歩輓車、腕車な

ごいふにおなじ。

日本大辭典(大和田)……人力にて曳く車。

これ等の解釋を比較せよ『二輪車』『彈機』『母呂』等、その車の如何なる構造たることを了解するに必要な事項を悉く明了に記すると、たゞひとをのせてひとのひくくるま』などの漠然たる解釋と、その精粗深淺同日に論ずべからざるにあらずや。

かくいは、或は曰はん。人力車は日本にのみ在る事物なるを以て、『じん

百科の學に達し、内外の語に通ずるにあらずんば成功するに能はざるものなれば、今日に於ては、到底一二人の力を以て成さん事を望むべからず。されば現時の西洋の大辭書は數十人もしくは數百人の手によりて成りしもの多く、スタンダート辭書の如きも、專任の學者三百四十七名と、引證係五百名と、その外に二三百人の各種の助手とを以て、五年の歳月を経て、始めて脱稿せりと云ふ、而してわが國現時の辭書は多くは一二人の手になりしものなれば、其不完全にして缺點多きも亦深く咎むべからざるものあるなり。吾人は宮内省もしくは文部省が十分なる資を投じて多數の學者を集め完全なる大辭書の編纂に従事せしめて、吾が文壇の缺點を補はん事を熱望して止まざるなり。

大和田氏の日本大辭書と藤井、草野兩氏の帝國大辭書とは出版の當時吾人が本誌上に於て批評を試みし事あれば、こゝには評を加へずして止みぬ。且つ又帝國大辭典は山田氏の日本大辭書を全くその儘に寫し

取りたりとも視るべきものなれば、已に帝國大辭典を評せし以上は、山田氏の辭書を評するは蛇足に類するを以て、又こゝには評せずして止みたり。又近日落合氏の公にせられたる詞の泉は空前の大著述なるよしなれど、吾人は未だ閲覽する事を得ざれば、他日その完成の上にて批評を試むることあるべし。(明治卅一年十月)

松窓餘韵終

明治卅六年三月一日印刷
明治卅六年三月四日發行

非賣品

編輯者兼
發行

芳賀矢一

東京市本郷區龍岡町十四番地

印刷者
仁科衛

東京市日本橋區藥研堀町三十三番地

印刷所
厚信舍

東京市日本橋區藥研堀町三十三番地

